The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Dossie Easton, ”Catherine A. Liszt The Ethical Slut”, Greenery Press, California, 1997
Author(s)	林, 健太郎
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 197-202
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Dossie Easton, Catherine A. Liszt
The Ethical Slut

Greenery Press, California, 1997.

林　健太郎

はじめに

本書は、本書の著者の一人でもあるJanet W. Hardy（以下ハルディ）が創設した出版社Greenery Pressから出版された著作である。本書はCatherine A. Liszt名義で出されているが、他にはLady Green名義で出されているものもあり、その多くはDossie Easton（以下イーストン）と共著のものとなっている（彼女は自身の子供が幼いうちはペンネームを使っていたが、現在は本名であるJanet W. Hardyで統一している）。当出版社からは、性、性愛、セクシュアリティに関する問題を取り扱った著作が幅広く世に出されており、本書はその中でも最も読まれているものである。現在ハルディは当出版社を経営する傍ら、カリフォルニアのSt. Mary's Collegeにて大学院生として研究に従事している。そのため、今まで数多くのワークショップやクィアコミュニティにて講師や講演者などとしての活動をしてきたが、現在は一時的に減らしている。もう一人の著者であるイーストンは、マサチューセッツ州に生まれ、現在は（特にセクシュアルマイノリティの専門家としての）サイコセラピストとしてサンフランシスコに拠点を構えている。彼女は夫婦・家族療法医（Marriage and Family Therapist）として活躍する傍ら、今もさまざま大学や団体にて講演などとしての活動を続けている。

本書の特徴としては、”slut”という本来は女性に対して軽蔑的、攻撃的な意味を持つ単語を定義し直し、そのslutとしての思想や他者と

の関係について考察している点がある。具体的には後に述べるとして、簡潔に言えば性行為を含む性愛関係を同時に二人以上ともつことに不道徳性を感じず、むしろ積極的に実践する人のことを指す。性行為を単なる本能的に欲望されるものと捉えてしまうと、著者らの主張をつかむことはできない。性愛関係とは、生物学的な性や社会的な性、性自認や性的指向に止まらず、さまざまな要因に影響され、つくり上げられていくものである。彼女らはslutとして生きている自分たちや彼女らが人間的関係を持った人々の経験談を交えながら自分たちの思想の中心を模索する。そこには、近代社会におけるセクシュアリティの変遷、特に昨今はクィアやセクシュアル マイノリティのみの問題ではないとされてきているポリアモリー[i]の研究に大きな影響を与えるものがあると私は考える。

倫理的なslutであるということ。

第一章では、本書における言葉遣いの定義と、そのような捉え直しが必要になってきた歴史や背景、それらとの比較がなされている。そして最も重要なのは、slut という言葉に付与される前提である。上で述べたように、slut という語は一般には他者を中傷する目的において使われるものである。もっと言えば、様々な男性と見境なく性愛関係を持つような女性に、道徳観念のない女性としてのレッテルを貼るための言葉である。それに対して、著者らは次のように定義し直す。つまり slut とは、性行為は素敵なことであり快楽は人にとって良いことである、という考えを基底とした生き方をする人である。そして、本来は女性のみを対象とする語であるが、ここではどのようなジェンダー・アイデンティティを持っていてもそう呼ばれうるとした。

ここには二つの考え方が含まれているだろう。一つは、性愛や性行為を根本的には「良い」ことだと前提していること。著者らは、無根拠に性的なものを「良い」ことだと主張すれば多くの反発があるだろうということは予想している。望まれぬ妊娠にエイズやその他の性病など、挙げていけば切りがないことは確かである。彼女らは、そのような問題を abuse という単語で片付けていく。つまり、それらは悪用された例を挙げているにすぎず、どんなものでも悪用される可能性は否定できないことから、それらは性愛や性行為を根本的に否定していることにはならない、と。

しかし、そのような単純かつ消極的な理由でこの議論を終わらせても良いのだろうか。ここで重要なのは、性愛や性行為が「良い」ことであるかどうかという点ではないと私は考える。第四章で著者ら自身が語るように、そこには「良い」と「悪い」の二値的な価値判断を超えたものが必要になってくるのだろう。この時点ではそこまでは言及していないので、話を次に進めるとする。

もう一つは、性の区別を二値論的に考えずに、もっと広いものとしてとらえている点。つまり、「女性」のみが指示の対象としてありえたのに対して、ただ単に「男性」も対象として認めたのみならず、人間である限り slut たり得るとした点である。つまり、性愛または

性行為の主体から、性の区別を取り除いたのである。

ここには、ある意味ではありがちではあるが、ある意味では逆説的な考え方が含まれている。もしも性的な区別を否定するならば、いかにしてその上で性愛の感情を抱くのだろうか。この問題を解決するには、「性的な」という形容表現を根本的に問う必要があるだろう。だが、この問題もこの時点で問うには早すぎるため、第四章まで後回しにすることにする。

では、以上にて示してきたようなslutたちは、いかにして倫理的だと呼べるのだろうか。この問いも、考え方によってはすでに矛盾をはらんでいる。つまり、同時に二人以上の人と性愛関係を結ぶこと自体が倫理に反しているという前提に立つと、倫理的なslutという表現は最初から成り立たない。しかし当然ながら、著者らはそのような前提は受け入れない。確かにそのような倫理観はこのモノガミー[ii]中心主義的な社会や文化の中では当然視されるかもしれない。しかし著者らは、slutとして生きることはただ単に欲望に忠実になることとは異なることを強調する。

著者らが"ethical"という語で示したかった内容には、おそらく新しい意味づけをするという意味での積極性は低い。本書での slut という語は、性愛感情や性愛関係を持つ対象との関係以外はごく一般的な、常識的な人間とそう変わりがないという消極的な意味で ethical という形容表現がタイトル、もしくは文中で使われていると思われる。

他者との関係

第二章においては slut 同士の相互作用に関して、第三章においては slut と世間、実社会との相互作用に関して考察されている。slut 的な思想の中では、個人とはどのように理解され、他者というものをどのようにとらえているのだろうか。

第一章までの記述を踏まえる限り、slut たちは性的なものに対する制約や、明確な境界からは解放されることを目指している。それとは裏腹に、著者らは個人間の境界の重要性を説く。ここでいう「境界」とは一体何か。著者らは、自身がどこから始まり、どこで終わるのか、いかにして個として分離されているかという物的な境界を比喩的に用い、個々の感情、個々の意思を他者から分離するものとしての境界を重視するのである。

しかし、そのように単純に他者を規定してしまってもよいのだろうか。他者とは一体どこからであり、自己とは一体何を指すのか。この哲学的にも伝統的かつ基礎的な問題は、そうそう簡単に解決できるものではないはずだ。もちろん性愛感情を持つためには基本的には他者の存在を前提とするし、性愛関係も「関係」を持っている時点で他者を必要としている。だからと言って、簡単に他者との境界を設定してしまうのはいかがなものだろうか。

著者らは境界の議論を行う直前に、性愛感情もしくは性愛関係を複数の人に対して持つような人間は、何の壁も制約もない世界に住

み、分別も境界もないような人間だとしばしば言われることを問題視している。それに対して、一般に必要だとされる個人の尊重や個人間のルールの有無と、性愛の対象の方向と数が、それぞれ独立した問題であることを主張する。この主張自体はそれまでの議論から考えても不自然ではない。とは言え、意思、他者、境界に対して強引な前提に立ってしまっていることは問題であろう。

第二章から第三章にかけては、個人の境界というものをある程度前提としながら他者との関係に関する議論が進められていく。確かに境界というものはそんなに単純に設定できるものではないかもしれない。しかし、個々人を思い切って非常に素朴に肉体としてかつ意思として分離できるものとして扱うことにも利点は存在する。それはどのような場合においてか。本書は、セクシュアリティ、性愛、性行為に対する今までの考え方や前提を整理し、それらの（当時においては）新しい・革新的なとらえ方を提案し・体系化を試みているという点において評価されている。しかし本書には、より実践的に、実際に slut として生きている人たちがどのようにして自己を肯定し、周囲や他者と関わっていけるかを伝えるという役割も意図されている。そんな中では、例えば婚姻関係が法的にどのように扱われるかという問題や、回避できる性病を回避することなどは、個人を単純な単位をとしてとらえることが最も有効だろう。もちろん法や制度、社会意識を根本的に変えていくことを目的にするならば別であるが、それ以前に最低限の社会への順応も必要だということも確かである。

多元論的 slut

最終章である第四章においては、いくつかの補足に加えて、結論が述べられている。著者らは、人々が持つ人間関係や思想が、属する文化や社会の持つ信念や思想に少なからずとも制限されているという立場をとる。そして、彼女らは人間関係に対する三つの思想のパターンを挙げる。

一つ目は、一元論的立場。この立場においては、あらゆる構造や関係は一つの要素に還元される。そこから、あらゆる疑問や問題はとある一つの答えに必ず収束する、という考えが導かれる。そのような考えの上では、たとえば理想的だと言われる婚姻関係に関しては、絶対的一点として存在する理想像に一致していない時点で、良い関係だとはみなされない。当然、そのような一点に完全に一致することはありえないのだが、その理想像の持つ範囲に含まれていると社会的、世間的に判断されればそれは「良い」関係と呼ばれるだろう。このように絶対的な理想像との一致不一致で関係の良し悪しを判断するような立場を著者らは一元論的立場と呼び、一点としての理想を無批判に受け入れている点を批判する。

二つ目は、二元論的立場。そこでは、仮に身体と精神が分かれているならば、それらのようにすべては二つの極に還元されるという考えが元となり、人間関係・性愛関係においてもそれらが適用される。個々の関係は、良いか悪いかのどちらかとしてしか評価されな

い。一元論的立場と似ている点として、軸の片方に「正解」を置くことによって、絶対的な正しさを基準に評価することができる点がある。このような立場も同じく、著者らは批判する。

さらにこの二元論的立場においては、批判の対象は評価や正しさに止まらない。たとえば「単」と「複」を二元論的立場において分離するという考え方自体が、モノガミー中心主義の上で一対一関係以外の関係の排除を助長している点がある。さらには、「愛している」という感情と、「愛していない」という感情を排中律的にとらえると、愛に種類や程度を一切認めないことになってしまい、まさに性愛が画一化されたものとなってしまう恐れがある、と。

三つ目は、多元論的立場。既に述べた二つと比べ大きく異なり、著者らが支持する立場である。個々の関係を一つあるいは二つの要素に単純化することなく、関係そのものをそのものとしてとらえる立場である。人と人とが関係すること、愛すること、ジェンダーを表現すること、家族を形成すること、そして世界の中で存在することの方法は数え切れないほどあり、どれも画一的に評価されることはない。著者らは、そのように多元的な視点に立つことを重要視する。

ここで、slutという語を再定義した際の問題点に話を戻すとする。まずは、slutとは性愛や性行為を根本的に「良い」ことだと感じている人だと前提していた点に関して。固定化された一点としての「良い」ことであるかどうかという評価基準を持つ一元論的な立場も、「良い」ことと「悪い」ことを排中律的に区別してそのどちらかにあてはめるような二元論的な立場も、そのどちらも第四章において否定されてきたはずである。やはり、slutの定義の中で「良い」という表現を用いるのは適切でなさそうである。たとえば「性行為を素敵なものだと感じ、それに喜びを感じることのできる人」のようにより広く定義を構えたとしても、本書における一貫した考えには矛盾しないだろう。

もう一つは、性別を二値論的にとらえずに、性の区別を否定した上で性愛感情を抱くことがありえるのかという問題。第四章でも述べられていたように、著者らは性の区別として男性性と女性性の二つしか存在しないことを否定し、個々人のセクシュアリティは、そのものとして認められるべきだという立場をとる。とは言うものの性愛感情を抱いている人は、文字通り対象として性的なものを感じているはずであり、性の区別をせずに性的なものを感じているという事態は、矛盾しているように見える。この問題は、著者ら自身が二元論的立場を批判するときにも言及している愛の種類や程度を考えると進展するだろう。つまり、性愛感情をまるでその最たるものが存在するかのように扱っていた点が矛盾を導いていたと考えることができる。

では、実際に「性的な」という形容表現で私たちは一体何を意味すればいいのだろうか。この疑問は、性に関する研究すべてに関連する疑問であるだろう。本書では、一対一関係を前提としないslutについて考察されているものの、それ以前に「性的な関係」自体が一体何なのかについては深く言及されていない。しかし、一般的に

言われる性愛関係の前提を越え出た関係をなお性的な関係であると呼ぶとき、実際には何が「性的だ」と言えるのかを考える上でのヒントがそこにはあるのかもしれない。つまり、異性関係かつ一対一関係という性質を持たない関係が、それでも非背徳的な性愛関係として成立することが言えるのであれば、性愛とその他の愛を区別する倫理観や貞操観は少なくとも当然視はできないはずである。

注

（1）polyamory。複数恋愛などと訳される。ポリアモリー研究を行うデボラ・アナポールが本書の直前に刊行した著作によると、責任ある非一夫一婦制の恋愛、性愛であると定義される。単に一対一を超える人数での婚姻関係を指す複婚・複数婚（ポリガミー・polygamy）とは区別され、必ずしも婚姻関係にある必要はない。さらに、単に一対一型の恋愛、性愛の否定形としてのノンモノガミー(nonmonogamy)とも区別される。つまり、ノンモノガミーには、いわゆる「浮気」や「不倫」も含まれており、形態として一対一の男女のペアから外れる関係が存在するとき、それらはすべてノンモノガミー的な関係と呼ぶ。対してポリアモリーとは、互いの同意と責任を前提としたまま複対複、もしくは一対複の関係、もしくはその関係を肯定する思想をいう。Deborah, M.Anapol, Polyamory: The New Love Without Limits : Secrets of Sustainable Intimate Relationships, Intinet Resource Center, 1997.

（2）monogamy。一夫一婦制を指す。狭義には婚姻の形態として、一人の男性と一人の女性をペアとしたときのみ婚姻関係を認めるもの。広義には、一対一関係において結ばれる恋愛、性愛関係。詳しくは注1を参照。